座談会

漢文の授業で何ができるか

――漢文教育の意義と可能性――

出席者（五十音順）

井関　義久（横浜国立大）

上田　　武（山梨県立身延高校）

佐々木　良（神奈川県立大清水高校）

田部井文雄（都留文科大）

戸川　芳郎（東京大）

司　会

伊藤　虎丸（東京女子大）

時…一九八〇年三月十六日（日）午後

所…若渓会　会議室

※　　※　　※

三時間半あまりの座談会を録音し原稿化する作業は、和光大学で引き受けたが、忠実にテープから再現した原稿を、結局は三分の一に縮めざるを得なかったため、貴重なご発言のかなりの部分を完全に削ったり、恣意的に縮めたりした上に、更に或る部分は、〔　〕内に論点の要旨のみを記録することになった。その上、この作業が甚だ難航したため、発行期限に間に合わなくなり、こうした場合の常識である、原稿を一度各出席者にお送りしてチェックして頂くという手続きをさえ省略せざるを得なかった。従って、各出席者のご発言の内容は、その本意を十分に伝えていなかったり、甚しい場合は全く誤解していたりする場合がないとは言えず、この座談会記事は、いわば編集者の〝創作〟に近いもので、文責は全く編集部（伊藤）にあることを、はじめにお断わりしておく。

それぞれにご多忙の中を、旅費自弁、〝手弁当〟でご参加下さった各位のご厚意に御礼申し上げると共に、その上、上記の如き非礼を敢えてしてしまったことに、心よりお詫び申し上げる。

※　　※　　※

〔最初に、編集部から、東京教育大学漢文学会を、大塚漢文学会としていわば再発足させるに当たり、会の目的として、㈠哲、

文、語学を分離せず、いわば「ことば」を媒介とする中国文化の総合的研究を行なうことの意味を改めて追求する、(二)会員の構成からも、中学、高校での漢文教育の問題と正面から取り上げ、教育と研究の交流・結合の場をつくることをめざす、という二点を掲げ、その趣旨から、再出発の第一号である本号には、昨年の大会での上田武氏の実践報告とこの座談会とを載せたいと考えたこと、各出席者の、現場体験に立っての、今日における「漢文教育」についての、いわば、現場で苦労している仲間を勇気づけるような、積極的な意義づけ、及び「こんなことがやれる」という具体的ご発言を期待したい旨の趣旨説明があり、次いで、この会をアレンジして下さった田部井氏から、当初予定していた鈴木嘉弘氏、毛利順男氏、村主幸雄氏が急に出席出来なくなった事情を含めて、出席者の紹介があった。〕

田部井　それじゃあ、おそらくご出席の方全部と面識があるのは僕だけじゃないかと思いますので、ご紹介を兼ねて……。〔出席者紹介等略〕それから、委員会の方で考えておられるのは、こういう座談会を少くも三年ぐらい継続してはどうかということなんですね。そうすると、長老と中堅と若手という風に分けて、最初はやはり中堅が〝叩き台〟になって、少し勝手なことを言って問題を出しておいたらどうか、と考えたわけです。我々は、小突き廻されてもいいんじゃないか、長老と若手と両方からね(笑)、そういう意味で、少し大胆な提言をしてみたらどうか、と思うんです。

内容については、基本的には今、伊藤君がおっしゃった通りだと思うんですが、まあ、時間は可成りありますから、ひとつ自由に話してみて頂きたいと思います。

一、前提となる幾つかの問題

司会　どのあたりから話をはじめて頂いたらいいか、編集部として何か問題提起をしなければなるまいと思って苦慮したんですが、田部井先生にご相談したら、雑誌〈漢文教室〉の八八号（昭四三）に載った「漢文教育と人間形成をめぐって」という座談会記事を紹介して頂いて……見ると、先程も出たように、我々は、長老と若手とのいわば〝板挟み〟の世代であるわけですが、そういう我々の世代の問題の幾つかが割にはっきり出ているようなので、この辺りを前提として話をして頂いてはどうかと思ったんです。つまり、ここで議論されていることあたりまではいわば前提として押えて、今日は、その先を、具体的あるいは積極的なお話を、うかがうことにしたいということです。

ざっとまとめると、まず最初の所で、田部井さんが、限られた授業時間の枠の中で、訓読の仕方とか教材をどうこなすかといったことを考えるのが精一杯で、**漢文教育では一体何を教えるのか**という風なところまで掘り下げて考えている余裕がなかなかないので……といったことを言われてますね。それをうけて西（順蔵）先生が、要するに戦前は、文明開化のための実用教育、科学教育というのが一つの柱で、それに対する精神教育というのを漢文が担当するというふうに目的がはっきりしていたが、戦後は、教育の中で漢文がどの部分を担当するかが、なんとなくはっきり

しなくなっているんじゃないか、と言われる。そういう形で問題が出されている。

これに対して、**第一**に出てくるのか、漢文というのは、やはり単に言葉を教えるだけではなく、「**人間形成**」とか道徳教育とか精神教育とかいう面で非常に貢献出来るのではないか、ということが、阿部吉雄先生、山崎道夫先生といった方たちから出される。――これについては、そもそも、阿部さんのそういう議論に対して若い人から反論が出たというのが、この座談会のきっかけだったわけですが、そうした反論を出した側にも、別に、人間形成に役立つべきだということ自体については、誰も異議があるわけじゃあなくて、どういう方向の人間形成なのかということが問題なのだということが言われる。つまり、明治初年に一度廃止された漢文がその後復活した、その時の復活にはかなりイデオロギー的、政治的な意味があった、教育勅語の発布なんかとも関係するような。そういうことが、今日もご出席の戸川さんなどから出ている。戦後にもう一度似たようなことがある。例の天野貞祐氏の道徳教育論と漢文復活が結びつけられるといった……。そういう、教育が国家目的と結びつけられることへの我々の世代の「アレルギー」が、ここでは出てくるわけです。

そこで**第二**に、人間形成というのは、そういうことではない、ヨーロッパでも、グリーク・ラテンといった古典教育を非常に大事にしているではないかという形で、「**古典教育としての漢文教育**」という側面が言われるんですね。――これに対して、西先生が、西洋古典の場合は、近代市民社会を形成した人間観の基礎になっているわけだから、これは少くとも、今日の市民社会が続く限りにおいては普遍性を持つだろうが、しかし漢文古典の場合は、ただ「古典」だからというのでそれと同一視して普遍性を主張することは、歴史的には不可能じゃないか、という指摘をされている。僕なんか、これは非常に大切な指摘だと思うんです。今日改めて、漢文教育をポジティブにとらえ直すという意味においてもですよ、改めて取り上げられていい問題だと思うんですが……。

しかしここでは、そういう指摘に対して、**第三**に、いや漢文は日本古典なんだ、日本人の文化の基礎を培って来た「**日本古典としての漢文**」という面が言われています。――国語に含められているという点でも、今日、そういう位置づけなんでしょうが、それならそれで、日本の文化の中における漢文文化というものを系統的に正当に評価して、きちんと教えなければいけないんじゃないか。万葉集や古今集の時代にも漢文文化はあっただろうが、実際に教えているのは、読み方は明治の漢文訓読だし、教材も明治の漢文の体系によって取り出された材料じゃないか、という問題が出されています。それからまた、漢文文化の根底に東洋の精神、中国文明というものがあるというのなら、これは「日本の」というよりまともに「中国の」古典として、現代中国から溯って中国の古典の精神を探るべきじゃあないか、という問題も出されています。

そうなるとさらに、**第四**に、その場合、社会科とか哲学とかいう形で中国文明とか儒教とかを取り上げるのと、漢文という形で

「古典教育」つまり「ことば」の教育としてやる場合とは、どうちがうのかという「**言語教育**」の問題にもう一度いわば戻っている。……以上のようなあたりのことくらいは一応ふまえて、その辺りで堂々めぐりするのはまずいんで、その先から話を始めていただいては、と思うんですが……。

二、問題提起――教材問題――

田部井　伊藤君から話があった時、整理すれば、**㈠教材の問題、㈡教授法の問題、㈢教員養成の問題**、これは**大学での漢文教育**の問題にもなるわけですが、この三つくらいの問題になるんじゃないかということを申したんですが。どうですか、初めから漢文教育の可能性みたいなことを大上段にふりかぶってというのでは、やりにくいだろうと思うので、実際問題としては、まず教材論みたいなところから入って、ある程度いったらそれをどう教えたらいいか、教えることにどういう意義があるか、という風に取り上げていったら発言しやすいんじゃないか……。

たとえば、吉川幸次郎さんなどが言われるのは、高等学校では、「論語」と「史記」と唐詩を教えれば、それでもういいんだ、というようなことでしょう。僕は大体その説に賛成なんだけど、それでいいのかどうか。具体的に言えば、上田君は、陶淵明を教えた実践報告をされたわけで、陶淵明は教え易いか難いか、その辺のところからまず何か聞かせてもらってはと思うんですが。

なぜ陶淵明を取り上げたか

――中国研究と教材編集――

上田　陶淵明をとり上げたのは、陶淵明像というのが、伝統的な、いわゆる「隠逸の詩人」という、そういう理想像になっている人間像と、それから、一方では、魯迅の例の「魏晋文人の風度及び文章と薬及び酒との関係」なんか以後の、新しいもっと人間的な、あるいは生臭い陶淵明像というのが出来上って来ていますね。ところが、漢文教育の世界では、前者の伝統的なものだけが、そのまま受け継がれている。それでいいのかなあ、というような疑問を感じて、陶淵明に注意するようになっていたわけですね。この前の報告の時にもちょっと話したんですが、現在十四種類ぐらいある漢文の教科書の中で、たとえば「飲酒其の五」というのは全部が採り上げている。しかし、その取り上げ方は、やはり、素朴な美しい自然の中にそのまま埋没している「悠然」たる詩人の姿といったところで陶淵明を見てしまっているんではなかろうかと思うんです。今日は、教科書を編纂されている方々もおいでになるわけですから、どんな風にお考えになって教材を編纂されているかということを、一度は伺いたい気持もありまして……。つまり、教材を作っていかれる側で、現在の学問の水準などと照らし合わせながら、何を考えて編集していらっしゃるのか、そんなことも一つ気になったものですから……。

そういう意味では、陶淵明というのは、対照が非常に鮮やかに出ているんで、一つの典型的な例として議論のための叩き台にはなるんじゃないかという気持で出したわけです。――たとえば、近頃、岡村繁さんのNHKブックスの『陶淵明』などというのは、ある意味では極端なところまで、陶淵明を一種のむしろ俗物

であったと見るような方向で、彼の中の魔性みたいなものまで剔り出そうするような見方をしていると思うんです。陶淵明の研究がここまで来ている段階でもって、我々が教室で陶淵明を教える場合にも、やはりそういう現実的な学問の研究の成果などというのも取り上げていくことが必要だろうかというような、そんな考えを持っていたわけです。――そういうことを含めて、漢文の教材の編集の仕方というのが、いわゆる江戸時代以来の、或いは戦前の、漢文が国家の教学の一つの支えであった時代の教材論というか、そういう編集からどこまで変って来ているのかということも、もう一つ伺っておきたい。なにか、我々がもっと新しい教材を付け加えていくことが出来るんじゃなかろうかというような、そういう意味では、いろいろな教科書に採用されている教材を、自分たちなりに整理してやるといったことも、これまでに何回も、静岡の鈴木さんなどと一緒に、繰返してきているわけなんですが。本当に、どんな教材を生徒に与えていったら、一番彼らにとって意味があるか、また、これは後で触れられるでしょうが、中国の思想や文化の伝統を正しく理解していく手掛りを与えることが出来るか……というようなことを考えているんですが。

教科書の限界と現場教師の工夫

田部井　僕も実は大学でクラブ活動みたいな形で陶淵明を読んでいるんですよ。そうするとあれだけ複雑な生き方や思索をした陶淵明という人間をある程度、高校生にも検討の対象にさせるためには数がかなり必要になってくるという気がする。その場合、教材としてどれだけ採れるかというと今のところ、かなり難かしいという感じがあるんですが、上田君などはどうですか。

上田　確かに今の教科書のスペースの中で十分な教材をのせるのは難かしだろうと思います。だから、そこから先は、現場の私たちが何を工夫していくのかということになるのかなあ、というように考えたわけで……。

僕の場合は、たまたま講談社の教科書を手にして、ある程度作品数があったので（詩六首と他に「帰去来辞」「桃花源記」など）、ちょっと面白くて、整理をしてやってみたんです。要するに「帰田園居」の「その一」と、「飲酒」の「序」と「その三」「その五」というようなものと、「帰田園居」の「その三」と「飲酒」の「その三」というようなものとは、教科書の中で、二つの系列にある程度類別できるものですから、それを私なりに整理してやったわけなんですが、もしそうでなくて、他の教科書を使うとすれば、やはり、ある程度、何か別の工夫をしてみたいと思いますね。ストレートに、高邁な超俗的な詩人というイメージだけで教えてしまいたくない。僕らみたいに漢文を専攻した者でなければちがうかもしれませんが、なまじ大学で勉強したり、かじったり（笑）していると、どうしてもそこまでいかざるを得ないのではないかという気持がするわけなんです。

後で、現場の実態というところでまた取り上げられると思うんですが、一応原則的に言えば、今言ったような工夫というか、教科書と現場とをどこでどう噛み合わせていくか、ということを、我々が考えていかなくてはならないんだろうと思っているわけなんですが。

田部井　上田君の話をきいて最初に感じることは、陶淵明を、そうやって現場で取り上げるということは、やっぱり教える先生の側のかなりの力量が必要だということなわけですよ。ですからどうしても教員養成の問題にもいってしまうのですけれど、今は教材問題に限定していえば、講談社の教科書は特例的に陶淵明をあれだけ採っていますけれど、現場ではなかなか受け入れにくい面もあるのではないかという気もするんです。高等学校の教材としては、ある段階になれば陶淵明もいいだろうけれど、その前に、論語、史記、唐詩といったところで、しっかりやっていく必要があるのではないかと思うんですが。

上田　それには賛成です。陶淵明中心に議論が進んでいくと、ちょっと漢文教育の現場の実態から外れていくように思えるので、もう少し拡げて教材観的なところを……。

「教材精選」の実態

佐々木　よく〝教材精選〟って言いますよね。そこにあるのは〔『高等学校古典教科書教材の調査』神奈川県高等学校教科書研究会国語部会教育課程研究委員会編　を示して〕昭和五二年くらいに出したものなんですが、昭和四八年度から今のカリキュラムになりましたからね、その年度の古典教科書の全部を網羅しまして、その教材調査をやったんです。古文、漢文の全てにわたっていますが、教育課程研究委員会の約十名くらいで担当して、三年程かかりました、予備調査から数えると五年かかっているのですけどね……。

そこでまず言えることは、「教材精選」という言葉はあるんだけれども、実態がつかめないんです。だから「教材精選」とは何か、といわれて、こうだ、という答は出しにくいですね。我々が旧制中学校で習った漢文などを思い起こしてみましても、教科書そのものの中味、一つ一つの教材は、今もそんなに変ってはいないんですね。さっき田部井さんが、論語・史記・唐詩ということを吉川先生も言っておられるということを言われましたけれど、やっぱりそういうものが多い。そういうものに引きずられて編纂しているというようなところがあるのは事実だと思うんです。

現場としてはね、それだけやればいいっていうことじゃあなくて、僕が思うには、「精選」ということを考えながらやる中で、日本なり中国なりの古典あるいはその文化といったものへの展望を、生徒たちが開いていく、その窓口というか手掛りというか、そういうものを与えていければ、一つ、漢文教育の目指すところというのは、責任をある程度果すことが出来るだろうというように思うわけで……。そういった視点で教材を選んでいけば、それは何も論語・史記・唐詩に限らないわけで、さっきの陶淵明も立派にそうだと思うんです。

教材としての「史記」

田部井　話を具体的な所へもどしたいんですが、以前に話合った時、佐々木君は、やっぱり語法の専門家だけに、漢文訓読の語法的な面を教えるには、どの教科書も採っている「史記」のような教材を使えば、それで一通りのことは出来るというようなことを仰言ったように憶えているんだけれど、そういう面から見て、教材としてこんなものがいいっていうのはないですか。

佐々木　さあ、そんな意識があったかどうか……。生徒にはやっぱり面白い教材がいいんで……（笑）。

生徒の価値基準というのは、面白いかつまらないかなんですよ。それは授業の内容なんですが、勿論教材の内容にもよるけれど、たとえば教材にドラマ性があるとかであれば、少々話が面白くなくても結構ついてくるという面もあるし、逆にあまりドラマ性なんかない教材も漢文には結構あるわけだけど、それでも持っていき方によって、こっちの技量によって、面白いとついてくるという場合もあるわけです。それで、僕は、古文の場合は結構解釈文法みたいなことをやるわけですが、漢文の場合は、あまり語法、語法と言わないで済ましているんです。それで良いのか悪いのかわからないのですけれど、今年一年生を教えているんですが、やっぱり語法、返り点のつけ方とか、複雑な読み方とかいうものについても、あまりくどくど説明しないで来てしまっている。むしろそういうことは、ある程度、一年なら一年、内容を面白くやったというようなことの上に立って、二年目あたりでやってみようかな、それも古文の場合ほどしつこくではなくて、やってみようかなというような気はしているわけです。

話を教材の問題に戻すわけだけど、これはほんの感想ですけど、やはり「鴻門の会」はいつやっても面白いですね。――「面白い」というのかなあ、語法の方でも非常に変化があって、そういうことまで取り上げると、どの位時間をかけてやったらいいのかわからないほど材料は豊富ですよね。

当然、教科書に出てる以外の「項羽本紀」とか「韓信列伝」とか「留侯世家」とか、そういったような所から必要に応じて持って来て、話をつなげていくということをやるのですけど、そうすると、余計肉づけが出来てきて、たとえば、同じ一つの言葉が、ここではこんな風に名詞として出て来ているけれど、こっちの文脈では、その動詞が出てくるだろう、というような指摘ですとか、或いは、項羽が怒ってばかりいると、「お前ら、ひとつ数えてみろ」というようなことをやってみるわけです。――「怒リテ曰ク」というのが沢山ありまして、それで、「先生、一つ『大イニ怒リテ曰ク』というのがあったよ」と言ってくる、「そりゃ大発見じゃないか」と（笑）……。反対に「『笑ヒテ曰ク』というのがあったよ」と。「どこでだ」ときくと、末尾の所だと言うから、「それじゃあ、その笑いはどんな笑いかな」という風にやっていくと、本当に、彼ら、浮き立って来るんですね。

佐々木　僕のやり方は、どんどんどんどん声を出して読ませていくんですが、そうすると、ところどころでも、とにかく覚えますね。あの「虞や虞やなんじを奈何せん」という歌など覚えてしまって、休み時間でもそれを使って遊んだりしている（笑）。

語法教材という面でも、確かに「項羽本紀」などは、いろいろな材料を提供してくれるという意味で素晴らしい教材だなと思っています。〔言葉の使い方という点で、同じ個所を「十八史略」で見てもどこかちがっている。本当に言葉を吟味して使っているように感じる。たとえば「スナハチ」（便、則、即、輒……等）でも、一つ一つ機能がちがっている。そういう教材としても使えるところは、やはり「史記」だ。〕

田部井　教材として、陶淵明は扱うのがちょっと大変だ。しかし「史記」や「十八史略」は内容も面白いし、大ていは抵抗なく入っていける。そういう点は一つ確認しておく必要があるのではないかと思います。

それから、入学試験なども頭において効果的な学習を考えた時、我々がよくやるのは、「基本句型」というやつで、抑揚形、反語形、疑問形といったパターン、「型」を教えこんでいくのは、非常に効率がいいように思えるわけです。その場合「史記」の「項羽本紀」あたりを全部洗い出していくと、基本句型と称せられる色々なパターンが一応全部出てくる。前に佐々木君たちと話合った時確認出来たのはそういうことだった。今思い出しました。

三、語法指導をめぐって

そこでぼつぼつ戸川さんに少しお話を伺いたいんですが、漢文の語法指導みたいなものですね、何をどうやったらいいんでしょう。

口移しで「型」を

戸川　今、問題になっていることというより、現在私が直面している問題から言いますと、結局、何もやって来ない学生を相手にして専門のことをやっているわけで、学生は、型としては中国の現代語をやっていて、そのまま専門の方に来るものですから、訓読ってものは何も知らない。読めないんですね。だから、それはもう口移しで、こう読むんだというようにやらざるを得ないんですね。で、これは私が大学院で先生に習った時にも、そういう形でした。私は個人的に指導を受けたことはないのですが、京都のある先生は、なんにも訓読の出来ない人を、一対一で前に置いて読んでやるんですね、大量では教えられない形式で、塾みたいな感じでしたですよ。文学の方は、吉川先生も、小川先生も、確か訓読はやっておられなかったですね。ただ、授業の形態から言いますと、小川先生が「説文解字段注」を読んでおられたんですが、中国語で読んで、それから訓読して、それから日本語で翻訳するという形で……。倉石先生に習った時みたいに、直接いきなり読んで翻訳するんじゃなくて、まんなかに訓読を入れてやっておられた。――

現在、私はそれをやっているんですよ（笑）。一応読んで、それで全部翻訳させて、それから一番最後に訓読する。型を覚えさす。その型をどうするかということは、確かに田部井先生の言われた通りに、もっと早い時期に型を暗記しておいてくれればいいんですが、もう大学の学生ですから、「こういう型だ、覚えろ」というよりも、練習でそのまま習慣づける以外にない。高等学校の初期にそういうことが出来れば……やはり型を覚えさせた方がいいんじゃないかなあ……。

井関　それには意見もありますが〔後出〕、型になじむということに関しては、僕は絶対賛成なんです。それは〝理解〟のためじゃなくて〝表現〟のためなんです。だから、そこは、小・中・高一貫で考えて、小学校では無理でも、中学ではどんどん「書き下し文」を使って所謂漢文訓読調に馴染んでおけば、高校では簡単

だと思うんです。極端に言えば書き下し文の形になじんでいれば、ひっくり返り方がわからなくても、読める。型になじむってことは、もっと早い時期にやっておいた方がいい。調子ですから。調子というのは理解ではなくて表現の問題ですから。

伊藤　僕なんかも、さっきのお話の「史記」の「垓下の囲み」のあたりなどね、今でも殆んど諳んじていますよ（笑）。ただそういうことって、教材の内容への感動と切り離せませんね。その意味ではやはり教材問題だ。確かに漢文というのは、そういう風にしてある種の言葉や表現の型みたいなものを覚えるという効能があったわけでしょう。ところが、僕は明治学院の高校で六年間漢文を教えたんですが、はじめて着任した時、主任が国語教育の専門家で、実際にも大そう力量のある人でしたが、その人から、漢文がともすれば「山高くして水清し」式に表現のパターンを生徒の頭に知らず知らずのうちに叩きこんでしまうのはいかんと言われたんです。生徒の思考をパターンの枠にはめこんでしまって、対象を自由にリアルにとらえて表現する能力を喪わせてしまうっていうことなのでしょうね。戦後の文学教育や作文（表現）教育の中にあった一つの傾向だったんでしょうが、僕はあれで悩んだなあ（笑）。そういうことはどうなんでしょう。僕は今では、むしろ、国語にせよ漢文にせよ、「名文」というか、詞華集的なものを、徹底的に諳んじさせる、パターンとして叩き込むことの方が表現を豊かにするために必要なんじゃないか、と思い始めているんですが……。何か国語教育の問題として根本的な問題がありますね。

上田　何んでも「型」っていうのは問題はあると思いますが、やはり訓読の型を与えるということは、授業の最初の手がかりにはなっていくと思います。

伊藤　「型」っていうとどうも固定的、機械的に考えがちなんだけど、実際は、訓読というのは、平安時代以来いろいろあるし、僕らが習った明治の型だって、副詞一つにしても、ずい分キメ細かく、いわば訳し分けているわけでしょう。その辺りが、僕らの年代でも、僕なんかはもう仲々教えられないんですよ。

戸川　今は反対に、まず意味を先に訳しておいて、それから「ああ昔の訓読は、こういう意味の時にはこう訓んだんだな」と、逆にわかってくるわけでしょう（笑）。

情況や場面を考えて読む

佐々木　こういうのがあったね。李白の「友人を送る」というのの最後に、確か、「蕭蕭として班馬鳴（いなな）く」という句があって、大修館の教科書には、その「鳴」に「いなな」という振り仮名がないんだ。そうすると、そのまま生徒に読ませると、「なく」と読むんだ。それでもいいけれど、馬だから「いななく」の方が気が利いているんじゃないか、というわけですよ。——そういう所なんかは、「型」といっていいのかどうか。もう少し一般的に言うとね、情況とか場面とかいうものを考えながら読んでいく読み方というのかな、そういうものは必要じゃないかという気もする。字引きで引くとゴジックで、よみ（訓）が書いてありますね。「いななく」というのはゴジックで書いてないわけですよ（笑）。そうすると、字引を引いて来て「班馬なく」と読

むのも無理からぬところなんだけれど、単に字引き的にではなく、情況というのかな、そういうものを考え方の中に入れて読むということが大事だし、そういうものが、伝統として（「型」として）伝わって来ているんじゃないんですか。

田部井　その辺は結局、さっきの陶淵明の理解に大きな振幅があるのと同様に、読みや解釈の問題で、漢文ほど諸説紛々としているものはないんじゃないかと思うほどで、その交通整理も、この辺である程度しておかなければいけないんだろうという問題があるわけです。訓読にしても、在来の多くの人のやって来た訓読もあれば、吉川流の訓読もあるし、江戸期だって後藤点とか何とか点とか、いろいろ読み方があるわけですから、高校の段階ではどの程度まで踏みこんで読んだらいいのかも、やはり検討してみる必要がある。

つまり、訓読というのはもう「解釈」作業ではなく、一つの古典的な読み方、定着したものという風に考えて、たとえば「班馬鳴（な）く」と読んでおく。ここは馬なんだから「いななく」という意味なんだと理解するのは、これはもう「解釈」の段階に入るというように位置づけてしまえば、訓読はなるべく簡潔な方がいいという考え方も出て来るわけです。

井関　ひと頃、訓読の統一ということを、文部省に陳情したことがありましたね。あの時は僕もあれでいいと思ったんだけど、今は、さっきから「型」を覚えさすという時の「型」という言葉に、この字はどう読むといった読み方まで含めることには反対なんです。いろいろ読み方が出来るということか、文学教育としても、表現を通じて理解を深めるという意味でも、必要なことじゃないかと思う……。

訓読とは「翻訳」だということ

上田　訓読というのは、一つの「翻訳」の型だと思うんです。そして、それは、どうしても、出来るだけ個性を没して、共通の読みというか、そういう方向に進んで来たんだろうと思います。明治四五年の文部省の調査報告とかいうので「型」が決まって、あれは随分色々な問題を含んでいるわけだけれど、それはそれとして、一つ大事にしておかないと、今の国語じゃあ漢文が成り立たなくなっていくと思うわけです。そういう意味での「型」を、教科書できちっと出しておいていただければ、それは現場に定着していくんじゃないかと思います。

伊藤　それでいいんだけど、その前提として、少くとも今言われた「翻訳」ということ、つまり「訓」読みというのは、先人が中国語に与えた翻訳の一つの型なんだということを、ハッキリ理解させておくことが大事なんじゃないか。――僕は今大学で漢文と初級中国語と両方教えてるんですが、中国語の入門も実は漢文から始めるんです。それで、まず漢字の「音」と「訓」のことを質問してみると、「峠」「鰯」といった「音」の無い字（国字）のことは大てい知っている。しかし「訓」の無い漢字を言ってみろというと、これは毎年、すぐ思い出せる学生はほとんどいないってことに気がついたんです。「茶」を大和言葉で言ってみろというと、「あっそうか」という顔をする。「菊の花」の「キク」なんか大部分の学生が「訓」だと思っている。つまり漢語を外来語と意

識していない。こういうこと自体、日本語の構造というか、日本文化論の好材料なんでしょうが、極端な場合、漢字には、音と訓という二つの「音」、読み方があるといった答が返ってくるんですね（笑）。

訓はいろいろあり得て、多くは実に適切な訳だが、時には先人の誤解もあり得るといったこと、当り前の事だけれど、少くともまずそこは押えておくこと、大事だと思うんです。

田部井　いや本当にね、僕は最近まで高等学校にいて、今度大学生を引き受けてみてよくわかるんです。高校で当然やって来たであろう訓読、返り点、送り仮名の付け方とかいったことをテストしてみるんですが、返り点を向って右側につけて（笑）、左側に送り仮名をつける、その仮名が片仮名ではなくて平仮名になったり、それはもう見事なものです。〝漢文教育で出来ることは何か〟と言っても、それはまずそういうことじゃあないか。出来ることだし、やらなきゃいけないことでしょう。そこの所は高校にいる者も大学にいる者も誰もが一致する所だと思うんです。

「理解と表現」

井関　そこでちょっとヤバイことを言いますが（笑）、僕は一時、行政の世界に入ってしまったものですから、小・中学校の方にどっぷり浸かっちゃって、今も実際にやっているのは初等科の国語教育なんです。そういう立場から言うと、漢文というところに来て、突然出来なくなるのが〝読書指導〟なんです。小・中学校では、読書指導の出来ない国語教師というのはもう駄目ですよね。これは、もう沢山読むんですよ、沢山読んでまとめさせるんですね。ところが、漢文の場合そのために邪魔になるのが訓読なんですね、訓読が出来ないと読んだことにならないでしょう。僕は高等師範の時、「読みに始まり読みに終わる」ということを聞いて、ずい分、抵抗を覚えたことがあるんです。その頃から読書指導を考えていたわけじゃないんですが、つまり、僕は読めないんですよ、あの白文で書いてある文章がね（笑）。やっと読めた時に「終わる」わけですね。読みに「始ま」らない（笑）。だから、訓読というのは、最初の「読み」は、声に出さずに読んでもいいんじゃないかと思うんです。つまりそれはさっきから言っている「訓読」ではなくて、低い次元かも知れないけれど、〝理解〟ですね。少ない知識で、まだ声に出しては読めないけれど、理解できている。声に出して読めた時には、これはもう〝表現〟の段階ではないかと思うんです。だから「読みに始まって読みに終る」ということは、肯定的に言うなら、最初の「読み」は訓読ではなくて、後の「読みに終る」という時に本当の訓読になるのではないか。

よく「表現と理解の関連学習」ということを小・中学校ではいいますが、高等学校の漢文や古典の授業になると、それがなくなって理解だけになってしまうんです。しかし、表現ということを、今僕が言ったように使えば、たとえば自分なりに声に出して訓読が出来るようになれば、それは表現で、だから表現を通して理解が深まる。「なく」が「いななく」になる。最初は読めなくても字を見れば「鳴」という字は小学校の三年か四年で出てくる字ですから、わかるんですよ。「いななく」と読めなくてもいいじゃないですか。読んでいくうちに、馬が鳴くんだから「いなな

く」と読めた時に、その表現によって理解が深まる。そう考えますとね、高等学校の段階で型を覚えてこいというのは、難かしいのではないか、こだわりすぎているんじゃないかって言いたいんです（笑）。

高校現場の実態から

佐々木　どっちとも言えないけどね。一つは、さっきから出ている基本句型やパターンを教えるということでは押していきにくい情況がありますね。また、入試ということも、考えないと言うと嘘になるけれど、正直な所ごく僅かしか頭にはないんです。そうすると、漢文を三年間やってどうあればいいかというと、訓点のついた漢文が読めればいい、こういうことなんです。――声を出して読ませる、ほとんどがスラスラ読めるようになるまでやらせるから、教材はいくらも消化出来ないんだけど、それが目標なんです。入試に白文が出て、返り点、送り仮名をつけよ、というような問題がもし出ても、百点中十点に満たない、配点はね……。その程度しかやらせないんです。――そうすると大学へ行って困るんでしょうけど、それじゃそれをやれば、訓点のついた漢文がスラスラ読めるようになるかというと、どうも、そうでもないのではないかっていう気がしてならないんですよ。

上田　「型」を教えら、じゃあ本当に漢文を読む力が付くかというと、僕はその点には疑問があるんです。量を多くやらせればまだいいんですが、非常に限られた時間の中でやっているわけだから……。だから、まず「型」でもって、一つの具体的な文章を読んで、そしてそれを、作品の中味として、その内容を自分のものにしていくということじゃないかと思っているんです。――たとえば評価の段階で、テストに白文を出しても、教えた文章に関して言えば、よく読ませておけば、彼らはそれで訓点をつけることも、送り仮名をつけることも、書き下しも、出来るわけなんです。――ですから、「型」を教えることが、まず高等学校の段階で一つやっておくことである。しかし別の新しい白文に出会ったら彼らはそれは全く読めないわけだと思いますけれど、せめてその辺までをしておきながら、内容の問題に重点を置いていく、そういうことでいいのではないかと思うんですが……。

しかし、入試などのことを考えると、今度の共通一次などでも、「いずくんぞ」という反語形が出たりしていて……あれは現場に大きな影響を与えると思うんです。そうなると、やはり、句型なんかを整理して、ここからここまでは全部覚えておきなさい……そして要領を与えてやる、どうしてもそういうことにならざるを得ないし……

井関　ウーン、だから大学でもっと長文読解を出さなきゃいけない。短かすぎますよ、古文も漢文も……。

佐々木　僕は実は去年四月から新設の高校に移ったんです。前の高校では、いい気持でやらせてもらって、いろいろ思い出す授業経験もあるんですが、神奈川県は高校進学率が九十四パーセントくらいあって、今の学校は前とは生徒がかなりちがうわけです。そうすると、ザックバランなことを言えば、教壇に立って一時間静かに授業を聞かせるという、それだけでもうエネルギーの半分くらい使ってしまう。僕は久し振りで、二十年ぶりぐらい

に、「先生」という経験をしているんですがね（笑）……。

それでとにかく、教材の内容には、正直いって、あまり入れない。わけがわかってもわからなくてもいいから、とにかく生徒を動かす。動かせば退屈しない。だから、読ませるということにとても時間がかかるんです。どんどん交代で読ませていく、長い文章でも短かくして。そういう形で時間を消化していく。

田部井　イヤ、全国で大方はみんなそういう苦労をしているんだ……。

佐々木　従って、内容の質問なんか、本当にすぐ返ってくるような易しい質問というところに限られてしまうんだなあ……。そういう状況の中では、大学受験なんていうのは、ちょっと問題に入ってこないですね。

上田　山梨というのもかなり僻地でして、しかも周辺校で、生徒の質は佐々木さんの所と変らないかも知れないんですが、ただやはり、生徒にどんな小さなことでもいいから、解らないことは解らないと言わせていくというか、それを表に出させていく。それを全部授業の中で取り上げるわけにはとてもいかないわけですが、そういう彼らの中から出てくる問題をとり上げていくと、彼ら自身が自分の問題として受けとめてくれますから、そのあたりから内容に入っていくということが、一つは出来るんじゃないかと思うんです。

授業の基本的な進め方は、やはり、沢山読ませて、読む中で漢文の一応の型というようなもの、句形とか言葉の使い方とかありますから、それは一つやらなけりゃいけないけれど、それだけで終ってしまったら寂しいという気がしまして……、その辺りどうなんでしょう。

佐々木　全然内容に蝕れないわけじゃないんだ。けれど、とにかくまず読ませて覚えさす。――大体ずっと詩をやるんです。短かいものでないともたないものだから。それで、時にはアクセントをつけて、一つ一つの詩の情況を説明したり、手はかけてやるんです。この間も、こっちがいい気持になってやれば、時に生徒もいい気持になるものなのだなあ、と思ったりしたんですが、たとえば、「青山北郭に横はり、白水東城をめぐる」という句を、絵に書かせるんですよ。すると、色々な絵を書くんです。たとえば、山並みがずっと後の方にあって前の方に街がある、その街の中を川が流れている。それから街の西側を流れる、あるいは東側を流れるとか、西側をずっと取り巻くように流れるとか……色々なパターンがありましてね……。

井関　そりゃまさに表現学習ですな（笑）。小・中・高一貫というのは、そういうことですよ。

佐々木　そういう風にやって、「それじゃあこの中でどれが一番この詩の言わんとしているところに近いかな」と……。こうやっていくと生徒の顔が輝やいてくるわけです。……そんなことはやりますけどね。

井関　そうすると、その学習は、やはり、書かれていることをつかまえるだけで精一杯ですね。そのあと、さっきの陶淵明がどうとか、その作者の思想や時代背景までさかのぼるとこれはもう駄目でしょう。

佐々木　少くともI乙の範囲ではそこまではいけないでしょうね。やるならIIでしょうと、僕は思ってますけど。

上田　僕の報告した陶淵明の授業も、そこまでいったのは三年生です。

佐々木　そうでしょう。IIで、週に二時間くらいみないと、出来ないんじゃないか。

田部井　井関君の話にはうなづける点も多いけれど、そうは言ってもやはり高校では、漢文の教科書を使って訓読指導がなされなけりゃならない。そうすれば、佐々木君の言うとおり白文は無理でも、少くとも右と左とアベコベに返り点をつけたり……といったことは、大学に受け入れる段階で防げるわけで、高校段階でどうしてもそこまではやらなけりゃならない。

確かに生徒の質には幅があり、そのすべてに適合する指導なんてあるはずないので、そこで、今の色々なご苦労を十分踏まえた上でそれでは教材としてはどういうものがいいかという問題になってくる。さっきの史記のようにどこの高校で使ってもやはりいいという教材はあるわけで、そういうことはここで確認されなきゃいけないことだと思うんです。

上田　現実に、昭和四十八年の教育課程の改訂で漢文の単位数が減って、そうするとやはり教材が非常に少なくなり、同時に均一化されて来て、以前のようなバライェティがなくなって、どの教科書でも、採っている教材は似て来ているということは、かなりいろいろな人が調べて、僕らもそう思っているんです。そういう意味でなら、さっきの話のように、唐詩、史記、論・孟といった所に、だんだん収斂して来ているということは、言えると思うんです。

そういう教材が少なくなっている中で、と言うより、時間数が非常に限られてくる中で、さっきも「型」の話になったわけだけれど、一つの言語主義というのか、言語の訓練という所だけにこだわるという傾向が強くなるわけです。果してそれでいいのか。基礎を与えることだから、それでいいんだという考え方も出来るし、一方、漢文（古文を含めて）というのは、広い意味での文学教育だとすれば、やはり、限られた枠の中で、もう少し内容を広げる道はないのかとも思うわけで、その辺が僕らの一番の悩みであるわけです。

四、漢文訓読の目的

なぜ「原文」でやるのか

伊藤　読ませるのが精一杯で、文学的・思想的内容に仲々入れない、受験めあての言語主義が強まるといった「悩み」が出ていますが、そういう風に内容に重点をおくなら、そして訓読が単に中国文を読む（内容を理解する、人間形成に役立つ）ための一つの手段・方法にすぎないなら、教材は何も原文でなくても書き下し文や、いっそしっかりした翻訳や注釈を使えば、ストレートに内容に入れるではないか、という素朴な議論が必ず出るんですが、そこをもう一度確認しておきたいんです。なぜ漢文訓読をやるのかという……。

戸川　上田さんは、あまり型とか言葉の点だけで漢文を扱うの

ではなくて、と言われたんですけど、だったら文学とか思想とかいう内容でいくと、いま伊藤さんが言われたような形の議論も出てくると思いますが、私はむしろ、――これは国語の専門の人にお聞きしたいし、日本の文化に深い関心を持っている人に聞きたいわけですけど――、要するに、日本語の形成ということを考えると、日本は現在でも漢字仮名混り文を国字としている。漢字を使っているし、漢字で漢語を沢山作ったりもしている。そういう漢字の含まれた日本語のスタイルというものを考える場合、どうしても漢文を訓読したりして来たという歴史をぬきには考えられないし、またそういうスタイルの中で、日本語を深め、また思考もしているということがあるわけでしょう。そういう日本語のスタイルを崩してしまって、全く新しい、漢字もなにもない日本語というものが考えられるのなら別だけれど、漢字と漢語を使っている以上、これは訓読のスタイルと切り離せない。それならば、それが弊害になっているということがなければ、やっぱりちゃんとした古文のスタイルと漢文訓読のスタイルとを、きちんと教えるべきだと思うし、その場合に、ただ訓読しておいた書き下し文で十分だという風には、僕にはどうしても思えないんです。やはり原文を見せて、本来こういう形で読んでいったんだということが解るようにしたい。

だから、むしろ国文の方の人とか、外国文学の翻訳なんかする人が「どうして訓読の調子をきちんと教えないのか」と私どもに聞かれるんです。どうも「しまらない」って言うんですよ（笑）日常語ではね。それで、そういう締まるような文体というものを、いったいどこで積極的に教えるんだ、と聞かれるわけです。むしろ国語教育の中で、そういうものを正確に――間違っていちゃ駄目ですが――伝えられるものならそうすべきだという考えがあるんです。中国語の文章そのものを、内容としてだけ理解するというのであれば、伊藤さんの言われるようによりよく翻訳したり注釈をつけたりということもありますが、日本語に影響を与えて来、また今後も残るものである以上、訓読は必要ではないかという感じです。保守的ですか。

上田　僕は一つの視点として、漢文を教える人たちが、漢文訓読も一つの翻訳の形式だということを、お互いの共通理解として持ったらどうかなと思っているんです。そこから始まっていかないといけないんじゃないかと。

田部井　その点は同感です。訓読の統一が出来ないのも、やはり歴史的にそういう性格があるからなんですよね。

伊藤　つまり「翻訳」ってことは、中国語と日本語、原テキスト（中国古典）と翻訳主体（日本人）との間の緊張・摩擦をも含むわけですよ。その点で僕は去年の大会の上田さんの陶淵明の実践報告（本号所載）に注目したんです。結局、生徒一人一人に新しい訓読、書き下しをやらせたわけでしょう。

上田　無茶かも知れないけど。

伊藤　この場合の訓読＝翻訳は、僕がさっき「いっそ翻訳でいい」と言った時のそれとはちがって、井関さんの仰言やる「表現」教育を含むわけですよね。そこが……

上田　訓読というのは、原文にいちばん近い形の翻訳だと思う

んですが、そこから後、僕が一つの実験みたいなことをやっているのは、それをもう少し幅のあるものに作り変える作業というのも、授業の中でやったら面白いというか、作品の内容の理解にかなり役立つんじゃないかと思ったんです。翻訳というと、すぐ土岐善麿氏や井伏鱒二氏のものを思い出すけれど、これは全然質の違ったものなので、僕の場合は、やはり漢文訓読はやって、訓読の文脈はきちんと生かして、出来れば漢字もそのまま使いながら、その内容を深めていければ、もう一歩向うの世界に踏みこめるんじゃないかということなんです。――なぜかといいますと、一緒に訓読をやって、そうするとそれでもう読めたような気持になってしまっているというのが、僕自身もそうなんで、そこにひっかかるものを感じているんで、まして生徒はそうだろうと思うんです。日本語の中に入って来て漢字の使われている意味と、漢文本来の漢字の意味とでは、ずい分違っている場合もあるわけですから、そこの所を何んとか解らせることが出来たら、それがとりもなおさず文学教育になっていくのではないかなという仮説みたいなものを持っているんですが。

伊藤　去年の御発表の後で、若い人が、ああいうことをやらせてみたいというのは、現場教師がみんな持っている夢なんだけれど、あれは、前もって余程キチンと生徒を把握して指導の手が入っていないと出来ないって、感心してましたけど、僕なりには、さっき、言語主義と文字主義の矛盾の悩みみたいなことを仰言っていたけど、本来は文学（思想）教育だからこそ言語と切り離せないというべきものでしょう。井関さん風にいえば「表現」と「理解」ですか。とにかく上田さん自身、実はここで両者の統一というか、「型」を教えながら訓を固定化した暗記の対象にしてしまわず、言語（表現）教育を通して内容（理解）に切りこんでいくための一つの実験をやっておられるように感じたんです。

日本古典と中国古典の間

単に「内容」ではなく「言語」（表現）教育なんだから原文で、ということは納得しましたが、もう一つ、初歩的な所に拘わりたい。それは、それならなぜ直接現代語訳しないで、訓読という厄介なことを一度するのか、ということです。

戸川　その方向でいったら、他の外国文学などと同じことになって、何も中国古典に限る必要はなくなるんじゃないですか。

伊藤　そうですね。だから、なぜ訓読漢文というものがあるのかと……。

戸川　国語というか、日本語の中のひとつとして考える以外にないんじゃないですか。そこから外れてしまうと、なぜ原文を持ってくるかということも出てこないし……。

伊藤　それを逆の方向に延長すれば、原文で読むのが当然で、英文学が翻訳で解るか。やはり英語の原文で読まなければ、というのと同様に、中国のものを理解するのに、翻訳（訓読をふくめた）では駄目なんだという意見が出て来ますね。

戸川　別に中国を理解するためにやっているわけではないのでしょう。

伊藤　でも、中国文化を理解することが目的だ、だから白文も読めなきゃいけないっていった考え方はあるんじゃないんです

か。

戸川　それはもう大分前から区別されてるんじゃないですかね。中国文化を理解するためには、何も古典だけがあるわけじゃなくて、現代文もある。漢文というのはごく限られた範囲のものだし、教材も限られたものである。その視点はあくまで日本文化と日本語のためのものであるから、中国のことをそこにいれますと、ちょっと困る。……

漢文を通じて、もとの中国の文化を知りたいと思うようになっていくというのは、ことの次元として必然だということはあるが、漢文教育の狙いはそこにはない。

田部井　そこがいつも問題なんで、キチッと議論しておく必要があると思うんです。日本と中国との関わりは歴史的にみても千年以上の堆積があるわけで、それを否定することは誰にもできない。――現代中国なり古い中国なりを理解するのだったら、それは高等学校の教材にはなりませんよね。それだったらイギリスでもドイツでも同じで、極論すれば大学でやることである。高等学校や中学校にまで降りて来てずっとやっていくというのは、漢文が日本の古典だからだと思うんですね。

伊藤　それが社会科とはちがうところで。

田部井　明らかに違うんで、漢文は日本語の根幹を造って来たものなので、山本健吉氏あたりに言わせると、日本の古典は「源氏物語」じゃなくて、「論語」であり「孟子」であるっていうんですよ。極論すれば、そこまで言えるわけで、そこのところを忘れてはいけない。――ところが屢々間違うのはそれからなんです。それをやっていると、ミイラ取りがミイラになるみたいに、中国を理解しなきゃいけないというので、ストレートに「論語」をやらなきゃいけない、「孟子」の精神を理解しなきゃいけない、中国古代文化について造詣が深くなきゃいけない、ということになってくるわけね。それはしかし断ち切れるかといえば切れないことなんですね。不即不離の関係を保っていかなきゃならない。非常に重い荷物を背負ってるんだということを認識しなきゃいけないんだと思いますね。断ち切っちゃいけない。それでいてそうじゃあない日本の古典として扱っていかなければいけないという、二重の性格を持っているわけですね。

伊藤　日本古典なんだってことは、よくわかりました。だけどね、それを教えていくとね、中国の思想と日本の思想とのちがいにぶつからざるを得ないという問題があるでしょう。その意味で、僕は、さっきの上田さんの実践の話で、日本と中国とでの漢字の使われ方なんかの「ちがいをわからせることが出来たら……」という発想なり方法なりを大切だと思ったんですがね。

田部井　でも、たとえば平安時代の人たちが「論語」なり白楽天なりを学んだというのは、「論語」や白楽天そのものを受け容れたわけで、それがそのまま日本人の血肉になってズーッと続いて来ているわけでしょう。だから、ここまでは中国本来のもので、そのあと日本人が理解したものはここから、なんて分けることの出来ないものとして、教材としても取り上げなければいけないということがあるわけですよ。

伊藤　だけどもそれは中国思想そのものを教えるわけではない

というんでしょう（笑）。分けられないと言われちゃうと、僕なんかは、竹内好さんの「日本はまだ中国文化から独立していない。だから西洋文化からも自立できないで、のみこまれている」といった問題意識を思い出しちゃうんですよ。――なにかそれでは、日本文化の伝統を子供たちに伝えていくという時、ちょっとこわい気がするし……。

上田　さっきからの「型」を覚えさすということは、漢文訓読調の和漢混淆文の文体を子どもたちにきちっと語感としてもつかませたいということがあると思うんです。それが現代の日本では日本語を別な意味でふくらませ豊かにしていく要素ではないかと思っているからですね。たとえば聖書なんかでも、口語訳聖書というのはなんとしても有難くないという気がするんですが、伊藤さんどうでしょうかね、明治に訳された文語訳の方が、文章としてもきちっと締っていて美しいという感じがするんですが、今の子供たちはどうなのか、それを美しいと思える文語調の語感は育てなければいけないと思うわけなんです。

それからもう一つは、そうであっても、それだけに終ってしまっていいのかという所が、さっき言ったことで、欲張っているかなと思うんですが、祖先が中国文化をどんな風に苦労して受けとめて自分たちのものにしていったかというところを、読解の作業の中で、わからせていきたいということなんです。たとえば、今の訓読文体と、その前に昔の人は、たとえば「関々とやはらぎなける雎鳩のみずとりは……」ですか、ああした読み方をしたということを、たまには出して教えてやる。そして自分たち自身の読み方をさせて較べさせていくと、非常に不十分だとは思いますが、漢文を、日本の祖先たちの中国文化を自分のものとするための苦闘のあととという、その流れの一端に立って、古典として受けとめていく要素というものが、彼らの中にレディネスとして出てくるんじゃないかと思うんです。

伊藤　外国文学としてではなく、国語教育として日本語、日本文化の歴史あるいは主体性を教えていくってことでしょう。いま、聖書の翻訳の話が出ましたが、僕は文語訳聖書というのは明治のエトスだと思っているんです。口語訳の方は戦後民主主義のエトスですから、学問的にはより正確になっている部分はあるかも知れないが、どこかふやけている（笑）。どちらも、ギリシャ語なりヘブル語なりのもとの聖書とストレートに同じではない。翻訳文学いや文体ってそういうものでしょう。漢文訓読体についても同じことが言えると思うんです。そこにはあの文体が固まったある時期の日本人のエトスがあるんで、やはり、もとの孔子なら孔子のエトスとはどこかが違うはずだと思うんで、その違いを教えないと、国語教育にならないし、主体性は育たないんじゃないか。

戸川　目標はそこまでいかなくちゃいけないと思うけれども、それは比較文化の問題でしょう。これは難かしいですよ（笑）。各時代の受容の仕方とかその時代の特色はあるに違いない。大体、我々の訓読にしても、ほぼ明治ぐらいの型を教えているわけで……。

漢文は近世古典

井関　日本古典として、訓読ということに拘わるなら、江戸時代風なのか平安時代風なのかがはっきりしませんね。古文といえば教科書には江戸時代が少ない、漢文などは急に江戸時代なんですよ。漢文が江戸時代を代表しているみたいなもので、ちょっとおかしいなと思いますね。

田部井　中国の古典を受けいれる成果が一番実ったのが江戸時代で、そこで定着したものを我々が吸収するんだと考える以外にないんじゃないか。

井関　そうハッキリすればいいんだ。それなら教える方も学ぶ方もそこを……。でも……〔以下、最初の上田氏の教科書編集側への問いにかかわって、「日本古典」というなら、陶淵明は、隠逸詩人の理想像として受容されたのだから、それを教えればいいのか（伊藤）それしか出来ないだろう。江戸期の受容の仕方を近世として継承していく外ない（田部井）、といったやりとりが続く。〕

五、教材問題についての総括

漢文教材の現状

田部井　ぼつぼつ最初に出した教材の問題に、決着をつけたい気がするんですが……。つまり、高校段階では、唐詩、史記、論・孟を教材にすれば大体いいんじゃないかという考え方が吉川先生はじめある。僕自身も二十年やってきた経験から言うと、これ以上のものを今の教科書に取り込んでいくということは無理だろうっていう気持が強くしているんです。一つは「史記」を代表とする歴史、もう一つは、唐詩を頂点に「詩経」から陶淵明などまで含めた詩、それに「論語」「孟子」、という風に考えると、この三つは誰しも異議がないだろうけれど、しかし、日本古典として考えた時、それで果して欠落するものはないだろうか……。

伊藤　日本漢文はどうなんですか。

田部井　これは現在の教科書も必ず取っていますが、ちょっと付け足しという感じはありますね。やるのは日本人の漢文ではなく、併せて載っている「長恨歌」とか「琵琶行」とかというもので。

伊藤　僕らの世代だと「母を奉じて吉野に遊ぶ」といったたぐい（笑）のものを沢山やらされて、「雲か山か呉か越か」とか「疎影横斜月清浅」なんてのが、いわば教養みたいなものになってもいるんですが。

田部井　これは調査をしてみるとはっきり出て来るんですが、旧制中学では日本漢文が圧倒的に多かったわけです。それが戦後の教科書では殆んどなくなっている。

伊藤　戦後の教科書は、一つには国家主義イデオロギーに結びつくような教材をパージした。民主主義に抵触しないようなものという、いわば消極的な意味での「文学主義」に流れた。もう一つは日本漢文が減った。これには一種の裏返しの近代主義があったと思うんだけど、日本漢文などというものは学問対象にならん、そういうものに古典性は認められないといった風潮があって、〝中国〟の古典に傾斜したということが言える。この二点が、教材面での戦後の漢文教材の特徴じゃないでしょうか。二つは相

関していて、たとえば、頼山陽の「日本外史」なんか全くなくなりましたよね。

田部井　それは国語の方も同じで、戦前は国学・擬古文が中心で、「源氏物語」なんかなかった。それが戦後変ったんで、教材選択という点では軌を一にしていると思うんだな。

井関　論説というときどんなものが入るんですか。江戸時代だったということになると論説は大事じゃないんですか。

田部井　ぴったりしたものが入っていない。現在の教科書でいえば、唐宋八家、韓、柳……。

井関　戸川先生の仰言ゃるように、これからの日本語の表現には、格調ある文体が必要だとしたら、その辺りじゃないですか。

田部井　何かの座談会でも、外山滋比古さんなどしきりにそういうことを言ってましたね。

戸川　英文とか外国文学の人が割によくそういうことを言いますね。

田部井　戦後崩れたというんだけど、今それを期待すると言われても「覆水盆に返らず」という所があってねえ。限られた時間数の中で漢文教育に何が出来るか、その〝可能性〟の中にそれを入れていくというのは、実に大変なことですよ。

井関　しかし、生徒がよく記憶するって言うでしょう。覚えさすなら「長恨歌」のような詩的な文体より、唐宋八家文のような文体の方がいいんじゃないか。実用的にきこえるが。言葉の使い方の「適否と美醜」ということをよく言うけれど、両方考えた時、適否もろくに解らんのに美醜を論ずるのはやはりおかしい。特に訓読の場合それは言えるんで……。

上田　教材観としては三つあるように思うんです。一つは中国の古典として見る立場が戦後とくに強調されて来た。もう一つは日本の古典という、「指導要領」の立場。もう一つ吉川〔幸次郎〕さんなどは、人類の古典だと、いう風に言うわけです。――ただその三つの枠ならどれでもいいというわけにはいかないので、優れた教材というと、具体的にはやっぱり田部井さんの仰言ゃるような、論・孟、史記、唐詩といったものになる。それ以外というと、今度は日本の古典とも中国の古典とも、どこまで言えるか、非常に曖昧で、境界がわからなくなってくるんですね……。

今後への提案―教材研究―

田部井　先程から、教材は「精選」されて来たが、それは本当に「精選」の名に値いするかといった発言があったと思うんだけれど、実際問題として、たとえば、陶淵明に百三十の作品が残っているとして、それをよく検討して、訓読指導にも適しているし内容も高い、教材として適当だといった判定をするのは大変なことです。また、日本人が、奈良、平安から江戸までどういうものを古典として見据えて来たか、そういう検討も、どこかでなされなければいけない、教材を探すだけでなくて、徹底的に調べていく必要があるんじゃないか、と思うんです。そうすると、たとえばこの漢文学会みたいな所で、戸川先生みたいな方の援助も受けながらやっていくことが、仕事としてどうしてもやらなければいけないことの一つとしてあるんじゃないか。――これは、教材論

の結論として、どうしても見据えておきたい気がするんですけどね。

井関　そういうことが、今は、各教科書会社の編集委員にまかされてて、どうしてか、という説得力のある説明が全然なくて、ただ教材として出て来ちゃうわけよね。もう少し説得性が欲しいですね。なぜこの教材かという……。

田部井　少くとも、今とり上げられているものの三倍とか五倍とかの教材を並べて、少くとも指導書を書くくらいの教材研究がされて、そこからまたもう一度洗い出して教材を取り出してくるという必要があるんじゃないか。

「精選」と同時に多様な教材を

上田　ですから、現場の教師と研究者とが互いに協力してやっていくというのは、大事なことだと思うんです。実際いって普通の高等学校では漢文の授業なんて非常に少ないわけでして、山梨県に二百人ちょっと国語の教師がいるんですけど、漢文を専攻したという人はすぐ判っちゃって、五人くらいしかいない（笑）。そういう中ですから普通の先生方は漢文なんて、本当につけ足し程度に思っているんじゃないかと、僕らのひがみかもしれませんけど、そういう気がするんです。そういう中で漢文を志ざした者たちがやらなきゃならないことは、ただ「精選」された教材だけを教え込んでいくというのじゃなくて――どういう形で与えるのがいいのか、僕は、こんなこともしてみたいなと思ったりするんですが、――やはり補助教材として幾つかのものを、たとえば書き下しで与えたり、あるいは有名な人の鑑賞文として与えたりしながら、それを読める形にしなければならないと思うんです。どれが教材として面白いかな、といつも見ているわけなんですけど……。そういうことで教科書などとくらべながら、現場の実践の中で生徒たちに本当に受けとめられるような教材をもっと用意していかないといけないんじゃないか。普通はどうも、こちら側――つまり教材を準備する側――での、こういうものがいいという分析で終りがちじゃないのかと思いますけど。

現代国語の場合にはそういうことが可能なんで、補助教材を沢山与えてやりながら、生徒にいいヒントもやって……。漢文でもたとえば『史記』の中でも「刺客列伝」とか「伍子胥列伝」なんてのは生徒が非常に喜ぶんです。で、そういうものを投げ込んでやらせてみると、また別な面白さを彼らが感じていくことになる。ああいうものも取り上げていきたいと思うんです。

つまり、現場の生徒との関わりを通して教材の選択を、ということなんですが、それには、実際には難かしいかも知れませんが、やっぱり、教科書で準備して頂く教材は、出来るだけ多い方がいいなと思うんです。あるいは、副読本でもいいと思うんですが。それを我々が選択していく方が面白い。欲張っているかも知れませんが。

田部井　いや、とてもよくわかるんです。その通りだと思うんだけど、教科書は値段やページ数で押えられて限界がある。それを補うものとして、教科書に取られない何倍かの分量の教材を、我々は蓄積として持つべきだと思うんです。この漢文学会が。

上田　そういう方向でもいいから、沢山のものを蓄積して、そ

れを現場の中で生かす道があるということを期待したいですね。

田部井　たとえば江戸の町人が読んでいたと思われるものには、東坡、山谷というのがよく出て来ますが、これは教科書にはあまり出て来ない。そういうものを含めて、漢文教材のリスト、総覧のようなものを作り、それにガッチリした注釈をつけて、ストックを十分持っていないといけないだろうと思うんです。

井関　一つの学校、一つの県でやれる仕事じゃないね。

田部井　そうです。だからこの漢文学会なんかは、高校にいる人がかなりの人数なんだし、総力をあげてそうした仕事を今後やっていくべきだということを、僕は今日は特に発言したかったんです。

教材精選の基準

伊藤　その際、教材を選択する基準みたいなものを改めてきちんと議論しておくことが大事だと思いますね。田部井さんの提案の仕事の第一歩としても。――すでにずっと話に出てますけれど、たとえば、難易度とか、生徒の側の関心とか、適否と美醜とか……。

田部井　その点では戦前は割にはっきりしていた。人間形成とか、もっと言ってしまえば、国家目的にかなうような人材養成のためとか。そこで「日本外史」なんかがどんどん採り上げられたわけでしょう。

井関　同じ教材を扱うなら、人間形成ではなく言語教育でしょう。

田部井　そう、戦後は、さっきの話のように違って来たんだが、実はそこを深く見定めないままに、なんとなしに、民主教育の中に抵抗なく入ってくる教材はなんだろうというようなところで来ているような感じがあるんですね。そうすると、どうしても文学に偏っていって……それへの反省も最近出て来ているんだろうと思うんですよ。

井関　だから〝言語〟という風に言ったらどうですか。大変実学的なようですが、人間形成を考えない教育なんてないんだから……今まで漢文が言い過ぎたんですよ。

田部井　漢文だけが人間形成を背負っているように考えたり言ったりした……

伊藤　その点では、科学は実用教育で漢文で精神教育をという一種の「和(?)魂洋才」式な発想が反省されているんで、むしろ科学そのものを人間の精神や倫理の問題としてきちんと取り上げることの方が大事で、我々の先人はそれをやって来なかったということが問題なわけですよ。

井関　その反省が、今、反動が過ぎるのかもしれませんが、国語が、小、中、高一貫して全部言語教育になっている。そこが年を取った人の気に入らないのですね、「何んでも言語、言語といって人間形成を忘れとる」というわけで。だけど僕はそんなにまた人間形成を蒸し返すことはないと思うんです。言語教育だと言ったって、結果的には人間形成をやらざるを得ないのが教材なんだもの。

伊藤　そこは大事ですね、言葉と人間の結びつき。さっきから言ってるんだけど、言語は単なる符牒やコミュニケーションの手

段じゃない。人間は言語で思考するんだから……ってのが、僕の漢文や中国語を教える時の基本です。

田部井　前から僕が一番言いたかったのは、言語教育でも人間形成でもいいんですが、なんでも正確に摑んでいこう、正確に理解し正確に表現しよう、〝正確さへの意志〟を養うという点で一致できるんじゃないかと思うんですよ。その点での対立についてはね。

井関　そういう風に言えばね。指導要領なんかでも、「適切な表現」「効果的な表現」という言葉を始終使いますね。我々は今まで「効果的」という方ばかり考え過ぎて、「適切」の方を少しおろそかにして来たんじゃないですかね。さっき言った「適否」の問題でもあるんですが、唐宋八家文と限らず、漢文はとても適切な表現をしている。その適切な表現ということを通して人間形成をやればいいんで、人間形成を先に考えて、そっちは後回しになっていたんじゃないでしょうか。

田部井　言語教材として「適切な」、もっといえば「正確な」表現がなされている、場合によっては「美しい」表現がなされているという基準である程度教材を精選できますね。

伊藤　もう一つ、人間形成ということを積極的に考えたら、これは教材というより扱いの問題だけど、さっきの「人類の古典」という教材観は大切だと思う。最初に紹介した〈漢文教室〉の座談会で出ているように、西洋古典の場合は、科学を含めた近代文化の基礎をなしているという意味での普遍性を持っているが、漢文古典は、少くとも戦前はそれを（民主主義などを）否定する根拠だったわけで、その西欧でも古典教育 humanities が崩れつつあるといわれる時代だけに、変に新しがって反近代・反合理主義の時流に乗るのも危険だ。そうではなしに、「日本の古典」でもある中国古典に新しい人類的な普遍性（古典性）を発見しようというのだろうから、これは、今後の、それこそ文明論的な課題で、性急には片付かないだろうけれど、やはり我々が無視してはいけない視点だとは思うんです。

佐々木　さっきから聞いていて、やはり、言葉の障害をのり越えていくことが非常に大切なことで、だから、昔の事をやっているのだけれど、現在僕らが生きているこの時代に引き戻すような捉え方というものが、一面必要だと思うんです。……言葉というものは、いつも情況を背後に背負っている。国語教師だからいつもそれを敏感に捉え直す努力をしているのだが……。たとえば生徒に解釈をさせても、全知全能を傾けて解釈してくる生徒なんていない。何かをみて写して来てスラスラ読み上げる。「じゃあどんな場面なんだ」と聞くと詰まっちゃってイメージがない。他人の言葉を借りてやっている習慣がすっかり身についてしまっている（同じ題で作文を書かせてみると、驚くほど画一的で個性がない）。言語教育とは、やはり自分の言葉で、理解の上に立った表現を、といったこと考えなければならないんで、それには、漢字というものを、今の僕らの背負っている時代背景、社会情況、そうしたものの中で捉え直していくという作業がいるのではないか。また、そうした捉え直しができるものが「古典」とよべるものではないだろうか。

教材問題としていえば、三本柱になるかな。一つは、日本文化に影響を与え、貢献したもの、二つ目は、「適否と美醜」、美しくなければならないといったこと、それから、やはり現代に引き戻し得る素質みたいなものを持っている、そういうものが欲しいですね。……

〔座談会はこの後、教授法の問題、教員養成の問題に話題を移して続いたが、紙面の都合で一切割愛する外ない。ただ後者については、(1)漢文は案外安易に教えられるという面があるだけに、一層、力量ある教員が必要である。(2)にもかかわらず、漢文の専任を置いている高校の比率は極めて低く、教員養成は急務である。(3)しかし大学で国語の教職免許を取るため必要な漢文の必修科目数は極めて少なく、若い教員はそのことを痛感し卒業後勉強している。(4)また大学の中国哲学・文学の研究は、中国にのみ関心が集中して、日本の教育文化に責任を負おうとする姿勢に乏しく、教員養成に無関心な傾向がある……等の問題が指摘されたことだけを付記しておきたい。〕

司会　今日は司会がうまく出来ませんで、申訳なく存じております。ただ、こうした試みの第一回としては、これまで大・高・中に分かれて、共に日本の教育を分担し合いながら、とかく無関係になりがちだった者が、これからは一緒になって考えていかなければならない問題について、僕個人は、幾つもの問題提起を受けることが出来たと感じております。有難うございました。

かつて僕らは、重い「漢文」の伝統にいわば抵抗して、新しい中国研究の道を拓こうと志しました。ところが、二十年後の今、新しい学問は未だ育たぬのに、あんなに重く感じられた伝統は脆くも風化しつつあるやに思われます。かつて僕らは訓読に引きづられて現代中国文を誤訳した。今や学生は現代語法に引き寄せて古典を誤訳します。この転変の中で僕は改めて漢文教育の意義を考え直そうと思いはじめました。単に歳を取って保守化したということではないつもりでしたが、ある高校にいる同窓の友人は、私の手紙への返事に、「漢文教育をすることにどういう意味があるのでしょうね」と書いて来ました。それは私自身の中にあるとまどいでもありました。漢文教育の技術的問題ではなく、そういう根本問題を、しかし、空論に走らず現場の具体的体験に立って、皆さんにお尋ねし、私自身も考えてみたいというのが、今日の座談会を企画した私自身の、個人的なモチーフでした。

お蔭様で私なりには、お見事な現場実践や小・中学校との関連から、また戸川先生の、明治天皇制下の護教主義的な中国古典学を排除した後の、やはり固有の中国思想・文学とはちがう「漢文学」を「日本古典学」の一分野として独立させ、日本文学の中で教えるべきというご主張などから、問題がかなりハッキリして来ました。戦後我々が科学的「中国」研究の専門性確立をめざした中にある種の近代主義があったことも……。

今日は、少々話が合いすぎた（合わせすぎた?）嫌いもあって、我々の中でもまだまだ角突き合わせてみるべき問題がありそうですが、まずは、最初に田部井さんが言われたように〝長老〟と〝若手〟とから小突かれる種は多少は出たのではないか。そうであれば幸いだが、と思っております。（文責　伊藤）